

## •ヘンデルのオラトリオ《サウル》における借用——劇的要素との関連を中心に

ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル (1685-1759) のオラトリオ《サウル》は、1738年に作曲された。英語による最初のオラトリオ《エステル》が書かれた年が1732年であることを考えると、《サウル》はヘンデルのオラトリオの中でも比較的初期の作品であるといえる。ちょうどこの時期から、ヘンデルは他の作曲家の作品を頻繁に借用するようになる。

「借用」という手法は、ヘンデルに特徴的な手法の1つである。ヘンデルの借用に関してはこれまでも様々に議論されてきたが、借用が音楽にどう影響しているかといった面はあまり強調されてこなかった。このことから本論文では、《サウル》における借用が、音楽の重要な役割を担っていることを示し、ヘンデルの借用の役割を考察する。

本論文では《サウル》における借用を、「劇的要素」との関連性を中心に考察する。これまでの先行研究で、《サウル》の音楽は、劇的表現に優れた音楽であると言われてきた。このことから筆者は、劇的な表現を生み出すには特定の音楽的要素があると考え、それらを「劇的要素」と名付けた。劇的要素は、《サウル》の音楽の劇的な部分、つまり盛り上がる場面や重要な場面に見られる音楽的要素であるともいえる。この劇的要素と借用とが関連づけられることを示すことで、《サウル》における借用の重要性が明らかとなる。

第1章ではヘンデルのオラトリオ作品を概観する。ヘンデルのオラトリオ作品は、特に1730年以降に頻繁に見られる。というのもそれ以前、ヘンデルはオペラ作曲家として活動をしていたからである。作品概観をするにあたっては、1730年以前のオラトリオ作品をひとまとめにし、1730年代、1740年代、1750年代という年代に分けて概観する。《サウル》が作曲された1730年代の作品は、合唱の使い方やオーケストレーションといった点で、これまでのオラトリオ作品では見られなかった発展的な要素が含まれている。また1740年以降の作品では、表現や題材に多様性が見られるほか、他の作曲家の作品を頻繁に借用している。以上のことから《サウル》を機に、ヘンデルは他の作曲家からの借用を頻繁におこなうようになったこと、またそれによって自らの作曲技法を高めていったことがわかる。

第2章ではオラトリオ《サウル》を具体的に見ていく。第1節では作品の成立を述べる。第2節では、《サウル》の音楽全体に見られる音楽的特徴を述べる。まずはこれまでの作品解釈から、《サウル》が劇的表現に優れた作品であること、またその劇的表現は台本作者チャールズ・ジェネズ (1700-1773) に依るところが大きいということがわかる。次に台本の概要を述べ、ジェネズが特に劇的な表現を促進させる場面、例えば勝利の場面や死を悼む場面を強調していることを示す。そしてこのような場面には、劇的な表現を生み出

すいくつかの音楽的要素、つまり「劇的要素」が含まれていることを述べる。本論文では「調性の変化」、「多様なオーケストレーション」、「レチタティーヴォとアリアの不規則性」、「合唱の活用」を《サウル》における劇的要素として挙げ、これらの要素が《サウル》の劇的な場面に現れることを指摘する。

第3章では《サウル》の中の借用について考察する。第1節では、ヘンデルの借用に関してこれまでどのように述べられてきたのかを、ヘンデルの借用に関する4つの代表的な文献の考察を通して明らかにする。これまでの借用に関する文献では、ヘンデルの借用は正当であるのかといった問題を道徳的な立場から議論したものが多い。また当時の音楽社会の視点から、当時はパスティッチョが流行していた時代であるので、借用は一般的におこなわれていたとしているもの、ヘンデルの伝記と関連付け、病気を経験してからヘンデルの借用は増大したという見方をしているものもある。しかし、借用が音楽にどう反映されているかといった音楽的な側面はあまり強調されていないことがわかった。このことをふまえて第2節では、《サウル》の中の借用を、音楽的な面から考察する。《サウル》にはフランチェスコ・アントニオ・ウリオ（1631-1719）の《テ・デウム》という作品が借用されている。《テ・デウム》の楽曲が使われているのは、《サウル》の中の盛り上がる場面や重要な場面、つまり劇的な場面である。このことから、借用は劇的要素と関連していることが明らかになる。またヘンデルは借用した素材を、独自の方法で発展させるなど、自分の音楽にうまく溶け込ませている。したがってヘンデルは、自分の作曲技法に刺激を与え、その技法をより豊かにするための素材として、借用をおこなったのではないかと結論づけられる。